

【登場人物】

トツカ 月刊箱庭巡りの編集長兼記者。人を作り出せると言う人庭を探している。

ウツミ アサキ、ユウの親でオオチの配偶者。人庭を作り、世間から孤立する。最初に作り出した人庭の犠牲者であるアサキをどうにかしたいと考えている。

ユウ ウツミ、オオチの人庭で作られた二人目の人工生命。ウツミと人である部分を分け合っているため、不安定な存在。ウツミを作り直し、ウツミに作り直されている。

オオチ アサキ、ユウの親でウツミの配偶者。お互いを作り直し合うウツミとユウの現状を良く思っておらず、終わらせようと行動する。

アサキ ウツミとオオチの家に存在する柱時計。意識を持っているが他者と交流することはできない。

イデキタ トツカ、ウツミ、オオチにとっての現実世界である箱庭の庭師。基本的には自身の箱庭内部には干渉だが、きまぐれで首を突っ込むことがある。

【箱庭】

人工的に作られたある程度のまとまりを持った仮想空間。地球規模での天変地異により地上での生活は著しく制限されたため、人々は一生のほとんどもを箱庭の中で過ごす様になっている。箱庭同士は道でつながっており、オープンなものもあれば閉鎖的なものもある。

【人庭】

人を作り出すことを目的とした箱庭。禁忌とされている。

くりかえしくりかえし同じところをめぐるような音楽。

アサキ ぼーん。

役者たちがアサキの言葉に加わっていく。地面から湧き上がる死者のようでもあり、天から降りてくる神のようでもある。

全員 ぼーん、ぼーん、ぼーん、ぼーん、ぼーん、ぼーん、ぼーん、ぼーん
アサキ ぼーん。

一瞬の静寂。暗闇。

アサキ 十年（とおねん）と十月と十日、あの日から経てしまったことをお知らせします。

舞台がぼんやりと明るくなるが、薄暗く、アサキの前にユウが立っているのが見える。

ユウ めぐりきたり、とて。どうしようというのでしよう。

くるくる、くるくると、先の見えない回廊を一步ずつくだってゆく。生まれ落ちた場所は遥か頭上にあつて。もうぼんやりとしてよくわからない。

見下ろせば。ぬわりと広がる、黒。黒。黒。

（ふと顔をあげ）またあの瞬きが見える。そうしてここへ戻ってきたのだと思ひ出す。

どうしようというのだろう。このまま踏み外して黒に溶けてしまえば、どうしよう、などと考えることすら無用なのに。なぜ、めぐむることを選び続けるのだろうか。くるくる。くるくる。くるくる。

ちりん、とイデキタが鈴を鳴らす。舞台が明るくなる。

ユウ はい。開いてますので、どうぞ。

トツカ あー、よかったー、やっと思つけた！人だー。

ユウ あの、どちら様で

トツカ いやー、突然すみません、（名刺を差し出し）わたくし、こういうもので。

ユウ 月刊箱庭巡り、トツカさん、

トツカ はいー。トツカ、やらせてもらってますー。

ユウ 名刺なんて、古風なものをお持ちなんですね。

トツカ ええ、はい、こういうアナログちつくなアイテムがあると、こうやって初対面の方ともお話が弾むでしょう。

ユウ 弾んでますかね？

トツカ ええ、そりやもうバインバイン。

ユウ ばいんばいん。

トツカ ええ、ええ、弾んできましたよ。ところで・・・

ユウ ああ、僕はこのものですが、家主ではないので、母を呼びますね。

トツカ お母様。

ユウ ええ、庭師なんです。（袖に向けて）母さん！ちよつと。

トツカ 親子で箱庭をやられてるんですか。

ユウ ええ。

ウツミがやってくる。

ウツミ どうしたの。

ユウ お客さん。月刊箱庭巡りの

トツカ トツカ、と申しますー。いやー、突然すみません、お邪魔しちゃつて。

ウツミ （怪訝そうに）どうやってこちらへ？

トツカ いやもう、本当にたまたま、ここ全然道繋がってないんですもん。

私みたいな物好きでないと見つかりませんよこんなところ。

ウツミ どうやって？

トツカ ……旧道を辿って。私、古い道を辿るのが趣味でして。

ウツミ そうでしたか。

トツカ そんな趣味が高じて、（名刺を差し出し）今ではこういったお仕事
をさせていただいております。

ウツミ （受け取らず、ユウに）道は全て閉じたはずじゃなかったの？

ユウ そのつもりだったんだけど。

トツカ 放置された道なんていくらでもありますからねえ。

ウツミがトツカをぐつとにらむ。

トツカ いやはや、すみません、すぎたまねを。

ユウ あの、それでどういった（要件で）

トツカ ああ、すみませんすみません。えーと、ご存じないですよ、月刊
箱庭巡り。

ユウ すみませんが。

トツカ いやもう当然というか、細々とやらせていただいているもんで。こう
しているんな箱庭にお邪魔しては取材させていただいて、月一で配信
させていただいています。

ユウ ああ、それで

トツカ はい月刊。いやそもそも月刊ってどうなんだよーとかねえ、思いま
すよねえ、普通ねえ。でもですよ、私にも生活つてもんがある。こん
なまったく売れないことばっかやってたらおなかと背中がー、くつつ
くぞ、なーんてね。あれ、ご存じないですか、どうしておなかが減る
のかな。

ユウ あのー

トツカ あー、ほんとごめんなさい、しゃべりすぎちやうのがアタイの悪い
癖、なんつってね。

ウツミ お帰りください。

トツカ まあまあそうおっしゃらずに。

ウツミ 迷惑ですの。

トツカ わかりました、ではこちらの箱庭の映像をすこーしばかし

ウツミ お断りします。

トツカ えー！それじゃあ私ここにきた意味がないじゃないですか！

ウツミ ユウ、外までお連れして。

トツカ ちよちよ

ユウ （玄関へ案内しつつ去る）こちらです。

トツカ わかりましたよ！帰りますよ！最後にせめてお名前だけでも。
ウツミ ……ウツミ。

ウツミは去る。

三、トツカとオオチ

いつの間にかトツカの背後にオオチがいる。

トツカ (反芻する様に) ウツミさん。……お会いしましたよ。

オオチ てつきり名前くらい変えていると思っていました。それで

トツカ おそらく私が辿った道は消されてるでしょうね。

オオチ 何かしらの対策はしたんでしょう。

トツカ 入口は別に用意しましたが、所詮素人の小細工なので。時間の問題
だと思えますが。

オオチ いくらですか？

トツカ いやいやいやいや、お得意様の頼みですからお金などいただくつもりは毛頭ございません。

オオチ それでは何を？

トツカ 人庭。

オオチ 私はとうに辞めました。ご存じでしょう。

トツカ 作るのはあなたじゃなくてもいいんですよ。なんならウツミさんに
作っていただく形でも

オオチ やめてください。

トツカ 悪いようにはいたしません。ただの好奇心ですよ。かつて両親が私
を産み育てたように、私もやってみただけです。

オオチ 人庭は作れば作る程不幸を撒き散らす。あなたが想像しているよう
なものじゃない。

トツカ そうでしょうか？私は何も幸福を求めて人を作ろうとしているので
はありませんよ。

オオチ ならなおさら、お渡しするわけにはいきません。

トツカ 残念です。(鎌をかけて)では、このお話はなかったということ。
オオチ ……。

間。トツカは話題を探している様子。

トツカ ……ところで、そちらの柱時計、ウツミさんのお宅でも拝見しましたね。

オオチ そうですか。

トツカ 家具のご趣味が似てらっしゃる？

オオチ いや、（アサキを見つつ）……アサキは、私たちが初めて作った人庭の、犠牲者なんです。

トツカ 話がよく飲み込めませんね。アサキ？さん？あれは、人、なんですか？

オオチ ……機会があれば、改めてお話します。

トツカ 無理にとはい言いませんが。気になりますね。

オオチ すみません。

トツカ わかりました。じゃあこうしましょう。私は引き続きウツミさん達とコンタクトを取るよう努力します。もちろんその内容をあなたにお伝えする義理はございません。いや、あるか。お得意様ですものね。

えーと、義理はあるけど、教えたくない！教えてほしくば

オオチ わかりましたから、仰りたいことは。

トツカ ちよっとも面白いところなんですから、止めないでくださいよ。

オオチ あなたを気に入ってはいますが、あなたの話は好きになれない。

トツカ ぐっさー！もうちよっと包んでいいんじゃないですか？

オオチ つつむ？

トツカ オブラート！

オオチ オブラート？

トツカ ……ほんと技術者は専門外のことは無知なんです。古い言い回しですよ。

オオチ 失礼。あまり言葉は得意じゃないもので。

トツカ それじゃそろそろ失礼しますよ。何かありましたら、また。

オオチ はい。

トツカは去る。

イデキタがひよっこり現れる。

イデキタ 作ってやりやよかったじゃん。

オオチ 見てたんですか。

イデキタ なんでそんなに忌避してるのか、わたしやよーわからんのだけれど。

オオチ 当たり前でしょう。人を作ろうとして、人でないものができてしまったら、よしんば人だったとして、人でなしだったら。可能性を考え出せばキリがありません。

イデキタ でも、あなたの親をはじめ、昔の連中はポンポン人を作り出していたわけだろう。同じようなリスクは抱えてるのにさ。

オオチ ……元々用意されている手法を使うのと、自ら手法を生み出すのとは天と地ほどの差があります。

イデキタ そうかね。その元々用意されている手法とやらも、つまるところ私が作ったものなんだが。

オオチ あなたは、

イデキタ ん。

オオチ 何も思わなかったのですか？我々の箱庭を作ろうとした時。

イデキタ そりゃもちろん思うところはあったよ。それでも、そうするしかなかったからさ。私の場合。

オオチ ……？

イデキタ 聞きたい？

オオチ 遠慮しておきます。上の世界なんて知ったところで自分の身が窮屈に感じるだけです。

イデキタ おとなだねえ、オオチクンは。

オオチ そうですかね。

イデキタ だからこうしてちょっかい出してみただけだね。たいがいのやつは知らなければいいことを知ろうとして、結局理解できずにがんじがらめ。あげく私を消そうとしたり、自らを消そうとしたり。どちらも意味があるとはわたしには思えんのだけど。

オオチ 意味なんて、

イデキタ 元々ない。意味は自分で作り出すもの。よいよその心がけ。あつ

ぱれ。

オオチ ……何しにきたんです。

イデキタ えーとその

オオチ 暇なんですね。

イデキタ ええ、暇です。

オオチ じゃあ、トツカさんについて行ってウツミの居場所を教えてくださいよ。

イデキタ ダメだってわかってるでしょ。

オオチ いいじゃないですか。どうせ意味なんてないんでしょう。

イデキタ 意味は自分で作るもの。ルールがなきゃつまらない。つまらなければ意味がない。

オオチ 結局我々はあなたの暇つぶしに付き合わされてるだけですか。

イデキタ そんなもんだよ。人の生はつまるところ暇つぶし。誰かの暇に付き合うのか、自分の暇に付き合うのか、そんな些細な違いしかない。

オオチ その差は大きい様に思えますが。

イデキタ それはオオチクンが変わってるだけ。

イデキタは去る。

オオチ あ、ちょっと。わからない人だな。

オオチはため息をついて佇む。

五、不明と過ぎる

一抹の不安を誘うようなやわらかい音楽。

オオチの声に呼応する様にアサキとウツミが語り出す。

アサキ わからない。

ウツミ わからない。ここは、私が望んだ場所なのか、この思いは、本当に

私が願ったものなのか、わからない、

オオチ わからない。

ウツミ 思えば、それは私の友人のようなものでした。わからないからこそ、

わからうとする。

オオチ わからないゆえに進んでみる。

ウツミ わからないのだから、離れる。そうしてここまで辿り着いたように
思えます。

今でもわからないは私の肌に寄り添って、私と外を隔てる膜から、す
るりと私に染み込んでくるのです。

アサキ わからない。どうやったら辿り着けるのか、なぜ辿り着かなければ
いけないのか、わからない。

ウツミ なぜこんなにも苦しまなければいけないのか、わからない。もしこ
の庭に庭師がいるのであれば、なぜ、

オオチ なぜ、

アサキ なぜ、

ウツミ と問い詰めて

アサキ も、

ウツミ 答えは返ってこないような気もする。

アサキ 日に、日に、

オオチ 流れのままに足を進めることで、

私の中の本当が、

アサキ みり、みり、

オオチ と音を立てて剥がれていくのを感じるのです。

何をなそうとしていたのかもおぼろげで、昨日よりも少し弱った身体
をさすりながら、それでも鈍く光る何かに突き動かされて、足を進め
るしかないのです。

ウツミ どうしてこんなにも、私は小さくなったのでしょうか。どうすれば
日々を安らかに過ごせるのでしょうか。

オオチ 何も持っていないければ、こんなに苦しまずに済んだのでしょうか。

それは幸せなような気もするが、もはや私ではないような気もする。

私。そもそも私は、私という在り方は、もうとうになくなってしまっ
てるのではないのでしょうか。

めぐりめぐる小さな輪の片隅で、私はギザギザとした縁に削り取られ
て、いつの間にか違うものになっていたのではないのでしょうか。

ちりん、とイデキタが鈴を鳴らす。

オオチ・ユウ はい。

アサキ 来訪から、二十一時間と十六分を、お知らせします。

オオチは去る。

六、ウツミとユウの日常

ユウ 開いてますので、どうぞ。

返事はない。ユウがやってくる。

ユウ ……？

やや遅れてウツミがやってくる。

ウツミ 誰？

ユウ 誰も。

ウツミ おかしいね。

ユウ そうだね。

ウツミ この前の、あの人

ユウ トツカさん？

ウツミ そう、あの人、何かしたんじゃない？

ユウ どうだろう。悪い人には見えなかったけど。

ウツミ 何か裏がある人だとは思ったよ。

ユウ そうかな。

ウツミ そうだよ。

間。

ユウ 今日はどうする？

ウツミ そうだね、昨日のこともあるし、道の見直しをしようか。

ユウ それならさつき済ませたよ。

ウツミ そう。

間。

ユウ とりあえず、お茶でも飲む？

ウツミ そうだね。

ユウは去る。

ウツミ (ふいに誰に向けるでもなく) おーい。

アサキ (声に反応する)

ウツミ (アサキに対して) おーい。

アサキ (声に反応して指先から引き寄せられる様に動く)

ウツミ 聞こえる？

アサキ (体の一部を震わせる)

ウツミ ねえ。

アサキ ちくちく。

ウツミ (立ち上がり) うん、何かを伝えようとしてるんだよね？

アサキ ちくちく。

ウツミ うーん、もうすこし。

アサキ (何かを伝えようとしているように見える)

ウツミ おーい。

ユウがマグカップを二つ持って戻ってくる。

ユウ お待たせ。

ウツミ ありがとう。

間。

ウツミ 今日は、ユウの庭を見てみようかな。

ユウ やだよ恥ずかしい。

ウツミ いいじゃん、この前見た時は外見(そとみ)しかできてなかったけ

ど、少しは中も進んだのかな。

ユウ いや、結局見た目ばかり気になっちゃって大して作れてないよ。

ウツミ その辺は父さんに似たのかね。

ユウ そうじゃない？

ウツミ 中の構造だったら私も色々言えるからさ、ね、見せてよ。

ユウ やだよ。

ウツミ いいじゃん。

ユウ 母さんこそ最近新作作ってないじゃん。どうなのよ、その辺。

ウツミ 私には、やらなきゃいけないことがあるから。

ユウ またそれ。たまには気晴らしに他のことでもしないと気が滅入っちゃうよ。

ウツミ 私には、そんな資格はないから。

ユウ アサキは、そんなの、望んでないと思うけど。

ウツミ 望んでるかどうかも、わからないように、してしまった。

ユウ それは、さ。

アサキを寂しげに眺めるウツミ。ユウはその背中を複雑な表情で見ている。

ウツミ ……今日は、ユウの庭を見てみようかな。

ユウ ……やだよ。

ウツミ いいじゃん、この前見た時は外見しかできてなかったけど、少しは中も進んだのかな。

ユウ ……進んでないよ。

ウツミ そっか。

長い間。

ウツミ ……それじゃあ、今日は、ユウの庭を見てみようかな。

ユウ 母さん。

ウツミ どうしたの？

ユウ ちよつと今日は疲れてるみたいだよ。部屋でゆっくりしてたら？

ウツミ そうかな。

ユウ そうだよ。

間。

ウツミ それじゃあ、お茶でも淹れてこようかな。

ウツミは去る。アサキは引かれるようについていく。

ユウ もう、か。

七、トツカ、再来

ふいにトツカが現れる。

トツカ お母様は、ご病気か何かで？

ユウ やっぱりいらしてたんですね。

トツカ あら、ばれちゃってましたか。

ユウ 入口の作りが杜撰です。さつき誤魔化しときましたから、母にはバレてないとは思いますが。

トツカ それは、どうも、ご親切に。

ユウ ・・・あなたは悪い人なんでしょうか？

トツカ どうでしょう。あなたの目的によります。

ユウ 目的、ですか。

トツカ ええ。

ユウ よく、わかりません。

トツカ そんなものですよ。まっすぐな目的を持った人間なんてそうそうお目にかかりません。大抵は相反する、倒錯した、矛盾を抱える目的をたくさん持って、人は時間をすり減らしていくものです。

ユウ そういうものですか。

トツカ ええ。

ユウ あなたの目的は？

トツカ うーん、そうですね。秘密です。

ユウ そうですか。

トツカ えー、そこはもうちょっと突っ込んでもらってもいいですか？

ユウ 人の秘密はあまり知りたくありません。

トツカ へー変わってますね、私けっこう知りたくなっちゃうんですが。

ユウ 母のことですか？

トツカ 無理にとは言いません。

ユウ 隠している訳ではないので。もうすぐ、作り直しの時期なんです。

トツカ ……作り直し？

ユウ ああ、僕はこの庭からほとんど外に出たことがないので、常識はズレな物言いでしたらすみません。

トツカ いえ、聞きなれない言葉だったもので。

ユウ 単に寿命が近づいているので、作り直すだけです。最近どんどん間隔が短くなってきた。このままだと、いつか消えてなくなるかもしれない。

トツカ ちょちょちよつと待ってください。お母様を、人を作っているんですか？

ユウ 新しく作っている訳じゃないですよ。ただの作り直しです。

トツカ どう違うのか、私には良くわかりませんが。

ユウ えーと、人庭はご存じですか？

トツカ ……ええ。

ユウ よかった。人庭でね、できるんですよ。こう、原始の海を模した環境で長い長い時間を経過させて、ある程度操作してやると、人の形をしたものができんです。

トツカ そんな簡単にできちゃうものなんですか？

ユウ ええ。人と同じように動くし、言葉もしゃべる。でも、それだけです。トツカ ……それだけ、でいいんじゃないですか？

ユウ ひと時を過ごす程度であればいいかもしれません。でも、長い間一緒にいるとわかるんです。ああ、これは人じゃない。小さな違和が積み重なって、最後は壊すか壊れるか。

トツカ それが、人庭が禁忌とされる理由ですか。

ユウ ……外の世界では良くないものとされてるんですね。

トツカ まあ、一般的には。（自分を指して）肯定的な人間、も中にはいますかね。

ユウ やつぱり、悪い人ではなさそうですね。

トツカ どうでしょう？あなた方の平穏を乱す存在ではあると思いますが。

ユウ 平穏、は、嫌いではないですが、好きでもないです。

トツカ それはあなたが若いからじゃないですかね。

ユウ 確かに今回の僕は10年程しか経過していませんが、僕自身はもうい

い年ですよ。

トツカ どういうことですか？

ユウ 初めの僕が作られてからもう何度も作り直してるので

トツカ 作られた？

ユウ はい。

トツカ あなたが？

ユウ 両親が人庭で僕を生み出したと聞いています。

間。

トツカ (おどろきを隠そうとしつつ) いや、なんというか、私にはあなたは普通の人間にしか見えませんでした。

ユウ そう言っていただけだと嬉しいですが、やっぱり僕は、いえ、僕たちははいびつだと思えます。

トツカ いや、

ユウ 普通は、作り直しなんてしないのでしよう。

トツカ あ、まあ、それはそうですが、それはお母様の話でしょう。

ユウ いえ、僕もです。

トツカ え？

ユウ 僕もしばらくしたら今の母と同じように、作り直しの時期がやって来ます。

トツカ あなたも、

ユウ そうやって僕たちは、作って作られて、めぐりめぐった輪っかに閉じ込もってるんです。めぐりを止めてしまえば全てが無になる。だから足を進めるしかない。回遊魚みたく同じところをぐるぐるぐるぐると、めぐりめぐって堂々巡り。

トツカ ……それでよいのです？

ユウ ……母は、止まりたくないように思えます。まだ父と暮らしていたころ、

八、オブラート

オオチがふいに現れ、背後から声をかける。

オオチ 湧き上がってきた感情が正しいか、正しくないかを判断して、正しいと思っただけだけ表に出すようにしなさい。

ユウ 正しくない感情があるのですか？

オオチ いや、感情には正も不正もない。感情はただの波、ゆらぎ。物理現象に過ぎない。

ユウ あなたが言うことは矛盾しているように思えますが。

オオチ そうだな、訂正しよう。湧き上がった感情が正しいと信じたい時、その時だけ表に出すようにしなさい。

ユウ 信じる。

オオチ そう。例えばユウが人を殺したいと思っただけでしょう。

ユウ そんなこと思ってますよ。

オオチ わかってる。例えばだ。

ユウ なるほど。

オオチ 殺したいという感情そのものが正しくないわけじゃない。そう思ったのなら、それそのものを否定する必要はない。

ユウ はい。

オオチ 大切なのは、その感情に対してお前がどうしたいかだ。ユウは人を殺したいか？

ユウ いいえ。

オオチ どうして？

ユウ 殺せば、殺される。自分もあなたも。

オオチ そうだな。だから殺さない。それで良いんだよ。湧き上がった感情に罪はない。お前が罪に問われるのは、お前の意志が行った行動に対してだ。

ユウ なるほど、理解できました。

ウツミが現れる。

ウツミ また変なこと吹き込んでるの？

オオチ 変じゃない、大事なことだ。

ウツミ まあ、よしとしましょうか。

ユウ はい。

オオチ ……アサキは？

ウツミ 短期的な刺激ではもう手段は尽くしたように思う。長い時間をかけて、少しずつであれば、あるいは。
オオチ まあ、そう願ってあの姿にした訳だけれど。
ウツミ あなたのそういうロマンチズム、嫌いではないけれど、解決には何も貢献してないからね。

ユウ・・・オブラート。

オオチ・ウツミ え？

トツカ オブラート知ってるんですか！

ユウ 僕もそこそこ懐古趣味がありました。

ウツミ とにかく、時間、時間が欲しい。永遠にも届く、終わりの、果てのない時間が。

ウツミは去る。

九、終わりに対して

トツカ はあ。なんというか、お母様のお気持ちはわかりましたが。あなた
はこれでよいので？

ユウ 最初にお伝えした通り、よくわかりません。・・・この庭を離れて外へ出たいと思う気持ちは、あります。でも、それでも、母さんとアサキを置いて行けない。行つては、いけない。

トツカ そんなことないと思いますけどねー。私なんかやりたいことしかやってないようなものですし、案外なんとかなるもんですよ。

ユウ そうなんでしょうか。

トツカ そうなんです。どうせ何をやったって終わりはやって来る。私にも、あなたにも。せめて終わりが目の前に立ったその時に、やってやったぜって言うてやれる様に、なんて私なんかは思っちゃいますけどね。

ユウ そんなふうに思えたら、いいですね。

トツカ 難しいことじゃありませんよ。あんたいったい何しにきたんだい？
って自分に言うてあげれば、あとは勝手に動いてくれますよ。

ユウ すごい、ですね。

トツカ おや、ありがとうございます。いやー、最初はとっつきにくい方か
と思ってたんですが、こうやって話してみると弾んでくるもんですよ

↑。

ユウ ばいんばいん？

トツカ おー、そうですそうす！ばいんばいん！

ユウ ばいんばいん。

トツカ ばいんばいん！

ユウ ばいん

トツカ ばいん

ユウ ばいばいん

ユウは去る。

十、人庭の要素

ユウと入れ違いでオオチが現れる。

トツカ とまあ、こんな感じです。

オオチ どんなかんじやねん。

トツカ え？

オオチ 失礼。

トツカ いやもうびっくりしましたよ。今も作っちゃってるじゃないですか、人庭！

オオチ ……ええ。

トツカ それならそうと言ってくださればよかったのに。もう、このケチンボ。

オオチ それを言ったらあなたはどうします。

トツカ えー、そうですね、もうオオチさんは用無し？

オオチ ほら。

トツカ あー、なるほど。そいじゃま、そういうことで……（去ろうとする）

オオチ 待ってください。

トツカ （歌舞伎調に）あ、べべん。待ってくれと言われてー、待つやつあ

オオチ 協力してほしいんです。

トツカ あ協力してほしいと言われてー
オオチ 人庭。

トツカ お。

オオチ はお作りできません。

トツカ えー。

オオチ が、あなたは人庭自体を望んでいる訳ではないのでしょうか？

トツカ ん？どういうことです？

オオチ うちの柱時計、アサキの後見人になっていただけませんか。

トツカ ……前にも伺いましたが、人なんですか、その、この方？は。

オオチ 少なくとも私たちは人だと信じています。

トツカ ……難しいご提案ですね。私には、彼には手足も顔もついている

ようには見えません。動いてはいますが、そこに意識があるのか、意志があるのか傍目にはよくわかりません。

オオチ それは、あなたから見た私も同じでしょう。手足や顔があったところで私が人である証拠にはなりえない。

トツカ まあ、それはそうですが。

オオチ それに、以前申し上げましたが、アサキは私たちが作り上げた人庭で生まれました。あなたの希望するものと同じではないが遠からずだと思えますが。

トツカ うーむ。ユウさんとこちらのアサキさんは、同じく人庭出身、というわけなんですよね？

オオチ ええ。

トツカ 私には全く別の存在に思えるのですが。

オオチ ……人庭には、必要なものが二つあります。一つは器。これは現代の技術を用いればそこまで難しい話ではありません。

トツカ ああ、ユウさんもそのようなことはおっしゃってましたね。人のようなものができる、と。

オオチ ええ。人庭を人庭たらしめるにはもうひとつ、必要な要素があります。

トツカ ……あんまりいい予感はありませんね。

オオチ 人。

トツカ やつぱり。

オオチ 人を生み出すのに、結局人がいると、そういう不毛なお話です。

トツカ あー、なんだかなあ。じゃあ結局、我々は少しづつ数を減らしてゆ

くだけですか。

オオチ 私たちの方法では。おそらく別の抜け道があると思っています。
トツカ というと？

オオチ 知人が、少なくとも知ってはいるはずなのですが。

トツカ たまにオオチさんのお宅に出るあの方ですか？

オオチ ・ ・ ・ 無断で人のうちを覗かないでください。

トツカ せめて鍵くらいかけましようよ。てっきりそういうオープンな方だ
と思っていましたよ。

オオチ まあ、見せられるものしかここには置いてないので。

トツカ さいですか。

間。

十一、人を作る

オオチ 最初の試みとして、ウツミを元にアサキを作ろうとしました。

どこか魔術めいた静かな音楽が聞こえる。

オオチ もちろん細心の注意を払って、ウツミに影響のないように、少しずつ、
つ、少しずつ、

ウツミ ひとしずつ、ひとしずつ、

アサキ ぽたり、ぽたり、

オオチ 高くそびえる山の麓に分け入って

ウツミ 未だ雪解けを見ない清流であろうその流れから

アサキ ぽたり、ぽたり、ぽったり、ぽったり

ウツミ 少しずつ

オオチ 少しずつ、つらの先から滴る雫を

ウツミ 取りこぼさないように

オオチ じっくりしむように

ウツミ 注ぐ。

アサキ さーさー

ウツミ 指先からつながるか細い線の先に、

オオチ 何かが確かにある気がして、
ウツミ 少し、安堵する。

オオチ しようとする。

ウツミ ひとしづく、ひとしづく。

アサキ 夜の帷（とばり）のすきまから

オオチ すーすー

アサキ 差し込んでくる光は

ウツミ ひとしづく、ひとしづく

アサキ とても温かで

オオチ とても緩やかで

ウツミ とても柔らかでそして

アサキ 怖い

オオチ とも思える美しきで。

アサキ ただ、眺めていることしかできませんでした。

オオチ ふいに

アサキ プツン

オオチ と

ウツミ わかたれる。

オオチ どうした？

ウツミ わからない。

アサキ ただ、ただ、湧き上がる全てが渦巻く荒波の中、眺めることしかで

きませんでした。

ウツミ おーい。

アサキ 呼ぶ声は、聞こえる。

オオチ （アサキに手をかざし）おーい。

アサキ かざす手は、見える。

ウツミ 何かの反応は示しているようには見える、けど、

オオチ 届かない。

アサキ 届き方が、わからない。

オオチ どうして。

ウツミ わからない。

アサキ わからない、

ウツミ わからない。

ウツミは去る。

十二、原因

オオチ 足りなかった。と我々は結論づけました。

トツカ ……何が？

オオチ ウツミが渡そうとした、人が人である部分、それが、足りなかった。
トツカ 足りないのなら、（もう一度渡せば）

オオチ 一度切れてしまった線は二度とつながることはない。そもそも、足りるはずなどなかったのだと私は思っています。それでも、ウツミは諦められなかった。

トツカ それで、ユウさんを。

オオチ ええ。ウツミの半分を渡すことで、ユウはなんとか人のような形にはなりました。その代償は、ご覧のとおりですが。

トツカ なるほど。

オオチ 私は、もう、終わりにしたいのです。生み出したものの責務として終わりは作らなければならない。

イデキタがひよつこりと現れる。

イデキタ 本当に？

トツカ おや、例の。

オオチ いいんですか、出てきちゃって。

イデキタ まあまあ、面白そうな人なんでいいかなーと。
トツカ 光栄ですー、あ、わたくし（こういうもので）

イデキタ あー、いいいいよ知ってる。

トツカ おや、いっぞやお会いしましたかね。

イデキタ もちろん。（オオチに）ところで。

オオチ なんですか。

イデキタ 本当に、終わらせちゃって良いんかね。

オオチ いいとは思ってませんよ。ただ、このまま時間に押しつぶされるよりも、自分の、自分達の意志で終わらせたいと、私は思います。
イデキタ 彼らはそうは思っていないわけでしょう？

オオチ ウツミは、そうでしょうね。ユウは……。

トツカ 少なくともこのままでいいと思っではなさそうでしたが。

オオチ どちらにせよ、二人と会話できなければ先には進めません。

イデキタ 進んでるのかな。戻ってるのかな。

オオチ やめてください。今の私には、他に選択肢がない。

イデキタ そう思いこんでるだけでは？別にいいじゃない。全部忘れちゃっ

てさ、全部放り出してさ、気晴らしに絵でも描いてみたら？

オオチ あなたは何がしたいんですか。

イデキタ 何も。

オオチ (トツカに) こういう人なんです。不用意に関わるとロクなことに
なりませんよ。

トツカ 面白い方ですね。

イデキタ おや、ありがとう。

オオチ (ため息をついて) もういいです。(トツカに) それで、お答え
は？

トツカ うーん、そうですね。

イデキタ それじゃこうしよう。オオチクンが見事目的を遂げることができ
たらトツカクンも約束を果たす。できなければ何もなし。

トツカ ええー。

イデキタ 君も面白いとは思っているわけでしょう。

トツカ ええ、まあ。

イデキタ それじゃ決まり。

オオチ そんな単純な話じゃない。私は、つまるところウツミとユウを、殺
そうと、言っているんですよ。

イデキタ いいじゃん、そんなこと誰にだってあるもんだよ。君だけじゃな
い、大丈夫、安心して。(トツカに) ねえ？

トツカ えー、ここで私ですかい。

イデキタ それにさ。

オオチ なんですか。

イデキタ 何度も作り直し合っている彼らを、生きている、と言い表すのは、
正しいのかね。

オオチ ……帰ってください。そして、もう二度と来ないでほしい。

イデキタ 残念。オオチクンのことはけっこう好きだったんだけどな。

イデキタは去る。

トツカ よかったんですか。

オオチ 大切な場所に土足で踏み入る人間は、好きではありません。

トツカ 私も嫌われない様に、言動には気を付けるようにします。

オオチ そうですね。よろしくお願いします。

間。

トツカ お受けしましょう。

オオチ ……ありがとうございます。

トツカ あれ、嬉しくないんですか？

オオチ なんとも、言えないですね。

トツカ なんだかなー。お受け甲斐のない人ですね。

オオチ すみません。

トツカ まあいいです。それじゃ、参りましょうか。

パチンと暗闇。

アサキ 作り直しの夜、を、お知らせします。

十三、めぐりきたりとて

静けさが物悲しく感じるような、秋の夜長のような音楽。

ユウ めぐって、めぐって、めぐって、ただ、またこの風景を目の当たりにするのか、と。結局わたしはこの場所から、この思いから、この諦めから逃れられないのか、と。

くるくるくるくと堂々めぐり。何度めぐりきたりとて、この場所を感じる味は、わたしをこわばらせ、縮ませ、けばだたせる。

どうしてこんなところに連れて行くのか。手をひくわたしに問いかける。

イデキタ おまえがのぞんだんだろう。

ユウ いや違う、

イデキタ とは

ユウ 言えないけれど、少なくともものぞんでこの場所には立っていないと、イデキタ 言った側から足元が崩れる気がして、

ユウ 結局無言を貫いてしまう。

イデキタ もう、考えるのを、やめよう。

ユウ 気晴らしに絵でも描こう。

イデキタ 後回し、

ユウ 先送り、

イデキタ めぐりめぐって、袋小路。

ユウ 意識の水面（みなも）から、深い深いところへ追いやって。

イデキタ 日常を正常にこなすことで、

ユウ 自分の本当をないがしろにすることで。

イデキタ いっときでも、楽になってしまえば。

ユウ いいのか。

もう、終わりが近づいている。

イデキタ いや、いつだって終わりはすぐ側に立っていた。

ユウ おまえか。わたしの終わりは。

おまえなんかには、わたしをどうこうさせてやったりなんかしない。

私は

ウツミ ユウ。

ユウ 母さん。

ウツミ もう、か。

ユウ うん。もうだ。

ウツミ 早いね。

ユウ 早いよ。

ウツミ 手間をかけて悪いね。

ユウ うん。

ユウはウツミの首に毛糸で編んだ輪をかける。輪の先は編みかけでユウは続きを編んでいく。

ユウ ほんとに、これでいいのかな。

ウツミ こうするしか、ないんだよ。

ユウ ほんとに、そうなのかな。

ウツミ そう、だよ。

ユウ 明日の朝、目が覚めたら、その母さんは、母さんなのかな。

ウツミ 意識は途切れても、ユウのことは覚えている。

ユウ それは、そうだけれど。

ウツミ ただ、寝て起きるだけ。それだけ。

ユウ そう、なのかな。

ウツミ そう、だよ。(あくびをして) 眠い。

ユウ おやすみ。

ウツミ おやすみ。

ウツミは寝入る。ユウは引き続き編んでいる。

十四、イデキタの夜

イデキタ おやすみ。

全て忘れ去って、全部放り出して、瞼を縫い合わせて、闇の中。少なくともこの時は、この時だけは、一になれる。

一人は嫌だったはずなのに、届くはずがなかりうと、誰かがほしかったはずなのに。

また、ここへかえってきてしまったのでした。

どんなに離れようと、どんなに流されようと、わたしの意思とは関係なしに、私の強固な意志に導かれ、ここへからだが届くのです。

とてもきらいなのに、この場から逃れたいと、心から願っているのに、どうしても、ここにたどり着くようわたしのからだはできているようなのです。

この庭に何を求めていたのか、今の私には答えられず。きっと、あの時の私に問いかけたところで、ただ、寂しかったと、そんな陳腐で不明瞭な答えしか返らず。

そも、目的など、あってないようなものなのです。意志などという朝靄(あさもや)に映し出されたまやかしを信じて、ここまで続けてきました、が。

どうでしょう。この様は。あまねく命は夜を渴望し、同じところをく

るくると、私のように、くだり続ける。
そんなな一人が良いのなら、生まれ落ちたまま、箱に閉じこもって、
終わりを待てばよかった。そう、ただ、ちくちく、ちくちく。

十五、アサキの朝

朝靄のかかった夜明けを告げるような透き通った音楽。

アサキ　ちくちく、ちくちくと。

ただ眺めていました。

ふと目が覚めたまどろみのような、やわらかで暖かな朝。

ちくちくと、私の前を通り過ぎる全てを、眺めることしかできません
でした。

なぜ、手も足も、口も用意されていないわたしに、わたしだけが入っ
ているのか、ずっとずっとわからないんです。

何もできないのなら、何も感じさせてほしくなかった。
どこへも行けないのなら、何も見せてほしくなかった。

何より、誰にも届かないのなら、誰もいらなかった。
などと、ひとりごちて。

ちくちくと、また今を昔にする作業を進めさせていただきます。

十六、アサキとイデキタ

イデキタ　何度も言ったでしょう。この通信方式では彼らには届かない。い

や、通信として認識されないと聞いた方が正しい。

アサキ　わたしは、このわたしの言葉しか知らない。

イデキタ　知ろうとしないだけでは？

アサキ　・・・。

イデキタ　私でよければ簡単にお伝えできますよ。文字通り、一瞬で。

アサキ　わたしは、わたしの言葉で伝えたい。

イデキタ　彼らにあなたの存在を認めてほしいのではないのです？

アサキ　父さんや母さん、ユウと話ができれば、それは嬉しい、嬉しいと思

うのです。でも、それでは今と何も変わらない。伝わっているように見えて、何も伝わらない。現にあなたに私が伝わらないように。

イデキタ なるほど。崇高なお考えをお持ちだ。

アサキ ありがとう。

イデキタ あなたのおっしゃる通り、存在とはどこまでいっても一人、一己（いつこ）、一つ。まわりにどんなにたくさんいたところで、1は1ですから。そういう意味では、確かに今のあなたと、彼らと、何も変わらないというのも頷ける。

アサキ あなたも

イデキタ はい？

アサキ あなたも一人なんですか。

イデキタ （にんまりして）はい。もちろん。なんてったって、あなた方の唯一神ですから。一人じゃないと、戦争とか簡単に起こっちゃうんですね。ここまで苦労しましたよ。わたしが本当にこの箱庭の主とわかっていただくために随分と骨を折りました。――

アサキ なぜ。

イデキタ なんででしょうねえ。たぶん、やることがなかった。あるいはそうしないとも何もやれなかった。

アサキ 暇つぶし。

イデキタ 暇、言い換えれば目的のない時間というものには、本来人はあまり耐えられる様にはできていないようなんですよ。

アサキ あなたも人なんですか。

イデキタ はい。もちろん。あなたがそうであるように。

アサキ ありがとう。あなたも、幸せになれるといいですね。

イデキタ 幸せ。いやな言葉ですね。どんな意味にもとれる様で、その実そんなものはありません。

アサキ すみません。

イデキタ あなたがわるいんじゃないですよ。

アサキ あなたもわるくはないですよ。

十七、おはよう

ウツミが目を覚ます。

ユウ おはよう。
ウツミ ああ、おはよう。
ユウ どう、気分は。
ウツミ うん、悪くない。
ユウ よかった。

間。

ユウ 今度は、5年ともたないと思う。
ウツミ そう。
ユウ ここを出ていくよ。
ウツミ そう。
ユウ おどろかないんだね。
ウツミ いつかは、そう言うと思っていた。

間。

ちりん、とイデキタが呼び鈴を鳴らす。オオチを連れたトツカがやってくる。

トツカ おはようございます。良い朝ですね。
ユウ いらつしやい。
ウツミ ……どちら様？
ユウ ほら、月刊箱庭巡りの
トツカ トツカでございますー。
ウツミ ……？
ユウ すみません。作り直しの前後は曖昧で。
トツカ そうでしたか。でしたら、（名刺を取り出し）トツカと申します。
以後お見知り置きを。

ウツミ （受け取り）ありがとう。
オオチ ウツミ。
ウツミ もうここには来ないでと、言ったはずだけど。
オオチ 必ず見つけ出す、とも言ったはずだけど。
ウツミ 見つかったか。

オオチ ああ。

ユウ (トツカに) やっぱり悪い人でしたか。

トツカ ね、乱しちゃったでしょ。

ユウ 平穩は好きでもないし、嫌いでもありません。

間。

オオチ 終わらせにきた。

ウツミ わかってる。

オオチ このまま続けるわけにはいかない。

ウツミ わかってる。

オオチ それじゃあ

ウツミ それでも、まだ、ここを離れるわけにはいかない。

間。

オオチ ユウをずっとここに縛り続けてもか。

ウツミ ……。

ユウ それでもいい。と思ってた。

ウツミ ごめん。

ユウ 自分が望んでいたことだから。僕だって、消えたくはないし。

ウツミ もう少し、もう少しだけ続けたら、届くかもしれない。

オオチ 届くことなどないのかもしれない。

ウツミ そう、わからない。それでも最後のあと一歩で、あと一言、あと一

滴で届くとしたら。そう願って。そう願わせてほしい。

オオチ それでも。終わらせよう。今ならちゃんと、私たちの意志で終わりを
を受け入れることができる。このままじゃ、私たちの預かり知らない
ところで、一方的に終わらされるだけだ。

ウツミ それじゃあ、アサキが。

オオチ 私たちじゃなくても、良いと思っただ。

トツカ 私でいいんですかね。

ウツミ どういうこと？

オオチ トツカさん。私の友人。

トツカ あら、光栄ですー。

オオチ 茶化さないでくださいよ。

トツカ すみません、ちよっとむずがゆくて。

オオチ とにかく、この方がアサキの後見人を引き受けてくれた。

ウツミ 後見人？

トツカ 私もよくわかっていませんが、アサキさんの今後を見守る、ということだけはお約束できますよ。

オオチ ありがとうございます。

ウツミ そんな、勝手に

オオチ 勝手はお互い様。それでも、アサキとユウをなんとかしてやりたいと思う気持ちは同じだと、思ってる。

ウツミ ……（トツカに）もし、仮に、あなたがアサキを引き取ったとして、そのあとはどうするんです。

トツカ そうですね。共に時を過ごす、くらいしか今のところは。

ウツミ あなたがいなくなったなら？

トツカ そうなる前に、別の誰かに託しますよ。

ウツミ 見つからなかったら？

トツカ 私の命に変えても、作り出しますよ。

ウツミ それじゃあ、つまるところ私たちと変わらないじゃないですか。

トツカ そうですね。ただ、少なくとも苦しいと感じる人の数は、減らせるんじゃないかな、と。

ウツミ ……。

トツカ そうやって、別の誰かか、はたまた別の私か。一人一人の家に受け継がれていく柱時計として、アサキさんが過ごしていつてくれたら、いいんじゃないかと私は思っています。綿々と連なるつながりの中で、彼は彼を少しづつ積み上げるのでしよう。いつかそれが他者に理解される日が来るのかもしれない。理解されないかもしれない。それでもいいと、私は思いますが。どうですかね。

ウツミ それは、

間。

ユウ 母さん。行ってきなよ。

ウツミ ユウ。

ユウ きつと大丈夫。大丈夫だから。

ウツミ でも、
アサキ 行ってらっしゃい。

アサキの言葉は届かないが、ウツミの表情は和らぐ。

ウツミ じゃあ、ちよつと行ってみようかな。
オオチ ありがとう。

間。

ウツミ 最後に、一つだけ。
オオチ ああ。
ウツミ ユウを。

十八、お見送り

電車がホームに入ってくるような、別れの訪れを知らせる音楽。

ウツミ ここまで、一緒に歩いてくれて、ありがとうね。

ユウ こちらこそ。

ウツミ ずっとずっと、ごめんね。

ユウ こちらこそ。

ウツミ 本当に、大丈夫？

ユウ もちろん。

ウツミ うちの庭は、そのままにしておくから。

ユウ うん、たまには帰って様子を見ておくよ。

ウツミ ありがとう。

ユウ それじゃあ、元気で。

ウツミ うん、元気でね。

ユウは去ろうとする、が去れない。

ユウ やっぱり、嫌だよ。

ウツミ うん。

ユウ 怖いよ。

ウツミ うん。

ユウ 行きたくない。

ウツミ うん。

ユウ ここから出たくない。

ウツミ うん。

ユウ どこにも行きたくない。

ウツミ うん。

ユウ でも。

ウツミ そうだね。

ユウ 行かないや。

電車の発車ベルのような、別れの瞬間を想起させる音。

ウツミ 行ってらっしゃい。

ユウ 行ってきます。母さんも父さんも、行ってらっしゃい。

オオチ ああ、行ってきます。

ユウは去る。

十九、行ってきます

オオチ それじゃあ私たちも。

ウツミ うん。どこへ行くか。

オオチ そうだな。ひとまず私の庭にでも。

ウツミ いや。

オオチ なんて。

ウツミ あんなオープンテラスみたいなどころ落ち着かない。

オオチ いや、裏手にはちゃんと

ウツミ せっかく出かけるんだから、もっと騒がしいところがいい。

オオチ 言ってることおかしくないか？

ウツミ おかしくない。

トツカ あのー、お取り込み中アレなんです

オオチ ああ、失礼。お恥ずかしいところを。

トツカ まあ恥ずかしいですね、こっちが。

ウツミ ごめんなさい。

トツカ もしよろしければなんです、お二人の行動を配信させてもらって
もいいですかね。

ウツミ え？

トツカ もちろんリアルタイムだと問題があると思うので、お二人が去って
から、ひっそりと公開させていただこうとは思ってます。

オオチ そんな面白いものにはならないと思えますが。

トツカ いいですよ、だから面白いんです。

オオチ うーん、どうする。

ウツミ いいですよ。

オオチ 意外だな。

ウツミ まあ。

トツカ ありがとうございますー！いやー、心の広い方達でよかった。

オオチ あなたほどじゃないですよ。

トツカ え？

ウツミ アサキの面倒を、よろしくお願いいたします。

トツカ え、あ、はい。よろしくお願いします。

オオチ それじゃあ。

トツカ ええ、お元気で。

オオチとウツミはアサキに向き直る。

ウツミ 行ってきます。

オオチ 行ってきます。

返事はないが、アサキが何か反応を示した様に見える。

ウツミ、オオチは去る。

トツカ 行ってらっしゃい。

やさしく見守る視線のようなやわらかい音楽。

トツカ それから。しばらくは何度もユウさんが様子を見にやってきました。彼は旅先で出会った人や、草花、風景の話などを、とても喜んだ様子でお話ししてくれました。気になった庭があったら私も出向いて配信で取り上げたり。賑やかな時間が多かったように思えます。やがてユウさんが姿を見せなくなって。オオチさん達からの便りも途絶えて。

それから。私はアサキと長い長い時間を過ごしました。最初はわからなかった彼の所作も、表情も、言葉も、共に過ごすことによって少しずつ、少しずつ私にはわかるような気がしてきました。たぶん、気がするだけです。でも、それでも私は無性に嬉しくなって、おーい

アサキ おーい

トツカ おーい

アサキ おーい

トツカ と、届いているかもよくわからない通信を試みるのです。

アサキ おーい

トツカ おーい

アサキ おーい

トツカ (小さく) おーい

アサキ ?おーい

トツカ 少しずつその声は聞こえづらくなり

アサキ おーい

トツカ 少しずつその声は聞こえなくなり

アサキ おーい

トツカ 少しずつ暗闇に吞まれながらも

アサキ おーい

トツカ 遠くの方で煌めく灯りが

アサキ おーい!

トツカ 誇らしくて、愛おしくて

アサキ おーい

トツカ やってやったぜ。

トツカとイデキタはハイタツチする。トツカは去る。

アサキ おーい。

イデキタ ……。

アサキ おーい！

イデキタ 聞こえてますよ。

アサキ よかった。

イデキタ また、一人になっちゃいましたね。

アサキ そうでしょうか。

イデキタ どうでしょうか。

間。

イデキタ 届きましたか。

アサキ おそらく、たぶん、きっと。

イデキタ あなたの幻想ではなく？

アサキ それでもいい。

イデキタ ずいぶんと都合がいい話ですね。

アサキ はい。

イデキタ 少し、羨ましいですよ。

アサキ あなたが、わたしをですか？

イデキタ それ以外ないでしょう。

アサキ そうでしたか。

イデキタ あなたのように、口を閉ざして眺めることに徹していれば、私も、私の箱庭もあるいは、と思ひましてね。

アサキ 口は災いの元。

イデキタ 沈黙は金。

アサキ でも、言葉にしないと、

イデキタ 言葉にしたいと、思っちゃうんですよね。

アサキ わかります。

イデキタ 本当に？

アサキ 本当、だと思えます。

イデキタ 今日はお別れを言いにきました。

アサキ そんな気はしていません。
イデキタ それじゃあ話が早いですね。私の暇に付き合ってください、どうもありがとうございます。

アサキ こちらこそ。あなたと時間を一緒にできて、嬉しかったです。

二十一、柱時計

長い長い時間が経つような音楽。

アサキ ちくちく、ちくちくと。

ただ眺めていました。

十六夜月に照らされた、広々とした道の傍で、ちくちくと、私の前を通り過ぎる全てを、眺めることしかできませんでした。

なぜ、手も足も、口も用意されていないわたしに、わたしだけが入っているのか、ずっとずっとわからなかったんです。

暖かき、柔らかき、喜び、怒り、苦しみ、虚しさ。

私の外側からやってくるそうした全てのものに、本当にそうなのかと、本当にあるのかと問いを続けたところ、こうして、ただ、ちくちくと、針を進めることになりました。

すると、さらさらと、流れていく全てに手を伸ばそうとしても、私にその手はなかったのだと思い知らされて。

私が在ることに意味があったのか、意味など始めからなかったのかそれすらも、ただ、ただ。

それでも、いま、ここにたどり着いた私を、愛おしいと思える様にはなつたようです。

などと、ひとりごちて。

終わりの訪れを、お知らせさせていただきます。

チリンと呼び鈴が鳴る音。アサキはそれに反応したように見える。

暗闇。

アサキ 行ってらっしゃい。

終わり。

※上演をご検討される際は、必ずクロ・クロ制作部までご連絡ください
クロ・クロ制作部 kurokuro.office@gmail.com